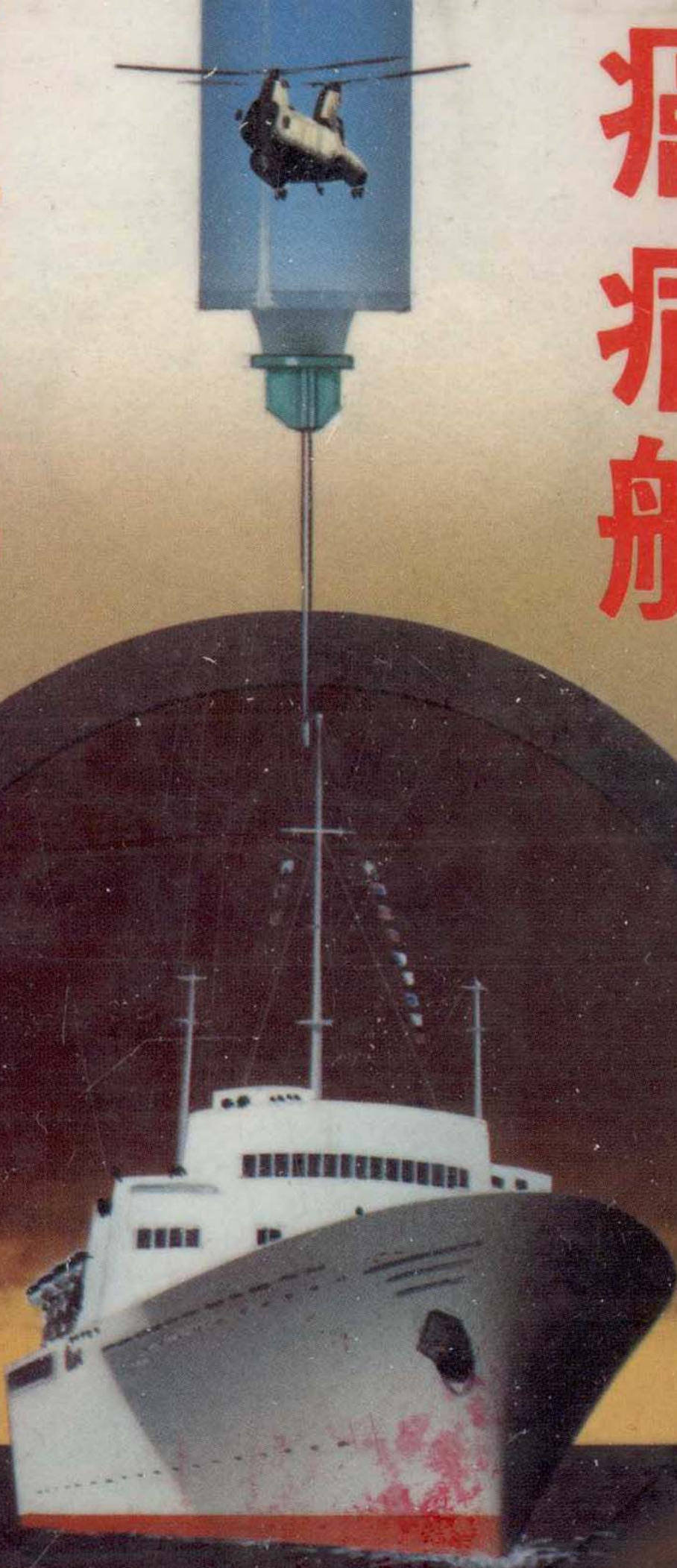


癌病船

西村寿行



がんびょうせん
癌病船

にしむらじゅこう
西村寿行

© Juko Nishimura 1984

昭和59年3月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。(庫一)

癌病船

西村寿行

目次

第一章 処女航海へ

五

第二章 癌撲滅シンガポール会議

九三

第三章 病魔の使者

一四四

第四章 カナリアの海

二二二

第一章 処女航海へ

1

簗くじに当たった少女を囲んで両親と幼い妹と弟の四人は、泪なみだを流した。

二DKの狭いアパートだった。

両親が一部屋を、子供三人が一部屋を使っている。子供部屋は四畳半だから、それぞれが机を置くことはできない。

三人ともねそべって勉強をした。

長女の夕雨ゆうこ子は十三歳になる。

夕雨子が勉強をしなくなって、もう、ひさしい。

白血病に罹かかったのだった。

最初は体がだるくなった。微熱もつづいた。しかし、両親は自分たちの仕事いそがが忙しくてかまっ

ていられなかった。父の大月雄三はタクシードライバーだった。母の由紀子は近所の工場に勤めていた。化粧品びんの瓶ふたの蓋ふたを造る会社だった。

夕雨子の皮膚が脆もろくなった。

引っ掻かき傷がすぐに化膿かのうした。ちょっとした怪我をすると血がなかなか止まらない。そうこうしているうちに肺炎を引き起こした。

両親は近所の開業医の紹介で大学病院に行った。

白血病であった。

細い血管の中で白血球が猛然と増殖していた。

夕雨子はその日に無菌室に隔離かくりされた。

飽和状態まで抗癌剤を投与する飽和療法が行なわれた。

広いマンションに移るために貯めていたいのちより大切なおかねが、消えた。

夕雨子は維持療法に移った。

両親は夕雨子を病院から引き取った。

死ぬか生きるかは半々だというのが医師のことばであった。生存率五十パーセントというのが、白血病と闘う医師団が死物狂いになってかち得た数字であった。

両親は夕雨子は死ぬと思った。

放射線治療で夕雨子の若い髪の毛はいのちを失っていた。ブラシを当てるとポロポロと脱け落ちる。固くて太い、しっかりした髪の毛だったのが、褐色に褪あせて細くみにくくちぢんでいた。

夕雨子自身も死ぬことを承知していた。

両親は泣いた。

貧しい両親だった。夕雨子に何一つしてやれなかった過去が胸に重いうめきとなって荒れ狂っていた。

両親はある日、新聞記事に目を落とした。

癌病船

その活字が両親の目を吸い寄せた。

説明があった。

世界保健機構（WHO）の付属機関であるリチャード・スコット記念財団が難病と闘う癌病船を建造したというのだった。

総トン数、七万二千トン。総工費二千二百億円をかけた想像を絶した巨大な癌病船であった。

癌病船は文字どおり癌と闘うために建造されたものであった。病室が八百室ある。八百人の患者に医師が三百名つく。

看護婦はマンツーマンで八百名。技師・薬剤師が八十名。

病院治療部門だけで千百余名が乗り込む。

病院事務部門が二百七十名。

癌病船乗員が三百五十名。

医師団は世界でもトップレベルが厳選されていた。

医療機器はもちろん最新鋭であった。

癌病船は北斗号と命名されていた。

北斗号は七つの海を航海する。

癌で死にゆく病人に世界各地をみせたいというのが、建造の狙いの一つであった。

陸地の病院は暗い。病室というよりは獄舎にひとしい。患者の心をもっとも蝕むのが病院の機構そのものであった。医師も看護婦も忙しい。患者は獄舎のような部屋に閉じこめられて死を待たねばならない。

癌病船に収容された患者には看護婦がマンツーマンで世話をする。医師も四交替制である。癌病船は世界各地の港に寄港する。港町の旅情を満喫できる。昇る朝陽の美しさも、沈みゆく夕陽の荘厳さも心ゆくまでみられる。

癌病船は十三層に分かれている。

ブリッジは最上階にある。そこは通称をキャプテン・デッキというが、癌病船ではAデッキと呼ぶ。その下がBデッキ、CデッキとつづいてMデッキまである。

D、Eデッキにはレストラン、社交クラブ、ダンスフロア、映画ルーム、ゲーム室、ショッピングセンター、プロムナード・デッキなどがある。

Bデッキには銀行もある。

医師団の中には精神科とそれに付属するケースワーカー団も含まれている。

宗教家も乗船している。仏教、神道、キリスト教、イスラム教その他だ。

患者には完全自由が与えられる。

病室に縛りつけられて死を待つ暗さは、ここにはない。毎日が未知の海であり、未知の国である。

さだめられた死も、癌病船で未知の国々を訪ね、七つの海を渡りながらなら安らかに迎えられる。

もちろん、医師団は全力を挙げて癌と取り組む。七つの海を渡るうちには悪性の癌を制圧することもできないわけではない。何よりも患者の明日に托す希^{のぞ}みが病魔との闘いには必要だ。奇蹟を癌病船は希むのではない。各人に奇蹟を生ましめる心の糧^{かて}を与えようというのだった。

癌病船建造の目的はもう一つある。

癌病船には世界最新鋭の機器を網羅^{もうら}した難病研究部門が設けられてある。研究スタッフは超一流を選抜してあった。

癌病船は医療後進国に寄港する。そこでその国の医師団を招いて集中講義を行なう。もちろん、その国の重症患者を診療し、治療方法を教える。

つぎつぎと医療未開国に寄港する。

本来の使命はそこにあるといってもよい。癌病船は世界の病魔に全面戦争を挑^{いど}んで人類がはじめて造った希望の戦闘船であった。

ただ、問題があった。

癌病船は希望の船だ。しかし、收容患者は八百名である。世界中には何百万人の難病患者がいる。それをどうするかであった。

ニューヨークにあるリチャード・スコット記念財団がWHOの指導のもとで決定した解決策が、抽籤ちゆうせんであった。

收容患者八百名のうちの半分にあたる四百病室は有資格者用であった。癌病船運営資金の一部として一病室一億円で売りに出した。死ぬまで滞在できる契約である。

売り出し後二ヵ月間でほとんど売り尽くしていた。

残る四百病室を公募こうふした。

これはいつさい、無料である。必要なのは小づかいのみであった。

WHOを通じて世界各国政府が公募を受け持った。人口比によって、その国の当選者数が割り当てられていた。

夕雨子の両親は癌病船に夕雨子を乗せてやりたかった。夕雨子には死期が迫っている。二DKのアパートに閉じこもったまま死なせたくはなかった。夕雨子には旅行らしい旅行をさせたことがない。海水浴とか、小学校のときに遠足に行ったくらいだ。

死が避けられないのなら、癌病船に乗せて七つの海を観みさせたかった。異国の港町を観させたかった。

癌病船には付き添いは乗せない。医師団も看護婦も船員も各国人で構成されている。リチャード・スコット記念財団が審査したひとつだ。だが各国語の同時通訳設備があるという。ことばにはいっさい不自由はないという。

それに船長が日本人だった。

リチャード・スコットの古い友人だった白鳥鉄善しらとりてつぜんという名の大船長といわれる人物だという。癌病船、北斗号も日本で建造している。

両親は神仏に祈りながら、応募したのだった。

夕雨子は黙っていた。

リチャード・スコット記念財団発行の乗船通知書がある。日本政府の認証もある。

夕雨子は、それをみつめていた。

夕雨子は癌病船に乗りたくはなかった。狭くても、両親と妹、弟の傍にいたかった。ここで死にたかった。もう間もなくいのちが尽きるのを知っていた。一日、一日といのちが薄くなつてゆくのが皮膚にみえるのだった。

しかし、ここでは死ねないことを夕雨子は知ってもいた。両親と妹や弟が迷惑する。夕雨子がいるだけで家が暗くなる。母も働きはやめてしまっている。夕雨子が癌病船に乗ったら、家は明るくなる。暗い病院に入院するのではない。無料だ。最新医療機器が揃そろっている。医師団も最高クラスが揃っている。

癌病船は横浜から出港する。全世界から集まった患者たちを乗せて九月一日にメリケン埠頭を離れる。

最初の寄港地はシンガポール。

真青な海を切つて、クイーン・エリザベス二世号より巨きな北斗号は病魔との戦いに乗り出す。

両親は夕雨子が乗れたことを幸運に思い、神仏に日夜、祈りを捧げる。いま頃はどこの海を觀ているのか、どこの港町を觀ているのかと。両親は何もしてやれない不甲斐なさを必死に祈るところで堪える。

両親や妹、弟を救うためにも夕雨子は癌病船に乗ろうと思った。

「世界中が、觀られるんだよ、夕雨子。それに、立派なお医者さんが揃っているし、海は、海は、夕雨子の病気を、治して、くれるかも……」

母は泪でことばがつづかなかった。

2

八月二十九日、正午。

横浜港メリケン埠頭に接岸した癌病船、北斗号で大パーティの幕が切つて落とされた。パーティの主催者は船長の白鳥鉄善であった。白鳥は短い挨拶をした。

日本国首相が白鳥の後を継いだ。

列席者は五百人を超えた。

日本政府要人、各国大公使および領事。財界首脳。医学関係者。日本赤十字そして、報道関係者であつた。

白鳥鉄善はホールの隅に立っていた。

パーティは、白鳥は苦手であつた。副船長のデビッド・ロートンに任せてある。ロートンは社交家であつた。四万トン級の客船のキャプテンを勤めた経験がある。リチャード・スコット記念財団本部から派遣された男だつた。

北斗号乗組員三百五十人のうちのほとんどは、本部から送り込まれていた。

白鳥の裁量に任されたのは甲板部員のみであつた。一等航海士一名、二等航海士一名、三等航海士一名の三名にすぎなかつた。

宴が酣になるのを待って、白鳥はパーティ会場を出た。パーティはDデッキで行なわれていた。船長室はBデッキ先端にある。Bデッキ先端は病院長、ゲリー・ハリソンの居室と二つに分かれていた。

双方ともに居室のほかに公室がついている。

白鳥が居室に戻ってすぐに来訪者があつた。

一等航海士の竹波豪一が入ってきた。

「公電が入りました」

竹波はテレックスで入った本部からの指令を、白鳥に渡した。

「掛けろ」

白鳥は英文のテレックスに視線を落とした。

「貴殿の裁量にまかせる、か……」

紙片をテーブルに置いた。

「どうします？」

竹波は白鳥をみつめた。

財団本部のやりかたに竹波は肚^{はら}をたてていた。

中東のある革命政府から追われているハッサン・マラディなる男が十日ほど前になって急に北斗号特別病室を買いたいと申し出たのだった。一億円の病室が現在、二部屋、売れ残っていた。マラディはその二室を買いたいと申し込んだ。二室で十億円を出す。そのかわり、自分のガードマンを五人、乗船させて欲しいというのだった。

ハッサン・マラディは肝臓癌にかかっていた。資格はある。WHOの一機関として認められたリチャード・スコット記念財団である。財団の綱領^{こうりよう}にはいかなる国の人間であろうと、資格さえあれば受けねの差別を禁じるとある。ハッサン・マラディが何をした人物であろうと、資格さえあれば受けねばならない。それが鉄則であった。

ニューヨーク州ロングアイランド島オイスターベイにある財団本部には六人の最高委員がいる。その六人が癌病船運営の実権を握っている。もちろんWHOの監督は受ける。最高委員会で

ハッサン・マラディを受け容れるかどうか、検討された。

結論が出ない。マラディは日本円にして十億円を出すといっている。本部としては魅力がある。七万二千トンの船を航海させるには膨大な経費がかかる。

北斗号は出力、二十五万キロワットの加圧軽水冷却型原子炉を積んである。それで動かすタービン出力は十万馬力が二基である。燃料費はかからない。

だが、乗組員、医師団の給料、医療機器、研究機関費用その他にかかる経費は、巨額である。たとえば横浜出港時に積む食糧を例にとると、鶏卵だけで十二万個である。ニンジン千五百キロ、トマト二千キロ、牛肉一万五千キロというふうになる。

それらが約一カ月で消費される。

財団は別に基金を持っている。それを運用して癌病船維持に充てることになっている。マラディの十億円は喉から手が出るほど欲しい。

だが、癌病船最初の航海で不祥事を起こしたくはない。

マラディの国の革命政府はマラディ殺しに莫大な賞金をかけている。政府自体が殺害組織を作ってマラディを追っている。

本部では持て余した。

船長裁断となったのだった。

船長その他の任免権は財団本部最高委員会が持つが、北斗号そのものの支配権は船長にある。

船が公海に出れば、その船内のすべての権力は船長に収斂される。